

ジャズ聴き分け 草分け

演奏者当て60年の「帝王」、傘寿超えても衰えぬ聴力 見富栄一

日本経済新聞 (2015/11/19付朝刊)

大音量のスピーカーから流れてくるジャズのアドリブソロ。全神経を研ぎ澄ませてその音色に耳を傾け、蓄積された音の記憶をたどる。曲名やレコード名を見ず、楽器の音だけを聴いてジャズの演奏者を当てる「ブラインドフォールドテスト」というゲームだ。私はこのゲームにのめり込み、60年以上続けている。

♪ ♪ ♫

通算正解率80%超

ブラインドの通算正解率はおそらく80%を超える。いつしかジャズ関係者からは「ブラインドの帝王」と呼ばれるようになった。この呼称が、私が今まで生きてきた証しなのかもしれない。

私が生まれたのは1932年。東京・恵比寿付近に住んでいたが、その後空襲を避けて信州に疎開。終戦後、焼け野原となった東京に生活のために戻り、中学を卒業してからは味噌の卸の仕事 시작했다。

ジャズと出会ったのは、仕事を始めて間もない49年、17歳の時。ラジオから流れてきた音楽に耳が反応した。その時は当然曲名がわからなかったが、後に30年代のスイングジャズの名曲「ドント・ビー・ザット・ウェイ」だったと知る。この米国発の音楽に興奮し、ラジオにかじりつくようになった。アーティ・ショウやベニー・グッドマンらが奏でる音は、戦後の荒廃した日本で輝きを放っていた。

1年ほどすると、少ないお金を元手に買い集めたレコードを目隠しで適当に取り、ジャケットを見ずにランダムにかけける遊びを1人でするようになった。誰の演奏かを頭に思い浮かべ、その後“解答”を見て確認する。コレクターではないので、手元のレコードはそれほど多くなかったが、その代わりに、1つのレコードを耳にタコができるほど繰り返し聴いた。

すると不思議なもので、いつの間にか奏者の吹き方の癖やフレーズの特徴などが聴き分けられるようになった。結局ほぼ10年間、ひたすらこれを続けた。

♪ ♪ ♫

提案受け日本初企画

60年頃になると、日本にモダンジャズブームが到来し、街にはジャズ喫茶ができ始めた。そんなとき、新宿のジャズ喫茶「ヨット」のマスターから

「何か面白いことを店でやりませんか？」という提案を受けたのだ。私は1人でやってきたレコード遊びを店でやってみようと考えた。これが日本における公の場でのブラインドフォールドテストの始まりになる。

米国では、ジャズ批評家のレナード・フェザーが50年代、ミュージシャンを相手に出題したのが始まりだが、私の出題相手は音楽家ではなく素人。第1回は60年4月、ヨットで開いた。

当時は誰もルールややり方を知らないで、私が進行、解説役を務めた。解答者はジャズ喫茶に入り浸っていた大学生ら約40人。ジャズに傾倒し、一言ある学生ばかりだから自信をもってブラインドに臨むのだが、やってみると非常に難しい。似た音色、フレーズを持つ奏者はたくさんいる。相当聴きこまないと正解を導き出せない。

この歴史的な第1回の後、60～70年代には新宿の「きーよ」「キャット」、渋谷の「スイング」などで連日ブラインド合戦が繰り広げられた。私も出題するだけでなく解答者として加わった。

油井正一、大橋巨泉らジャズ評論家も多数参加したが、私が解答者として参加すると、だいたい1位になった。「ブラインドの帝王」の呼称はジャズ評論家のいソノテルヲさんからいただいた。

♪ ♪ ♫

現在も月1度開催

80年代になると各地のジャズ喫茶は次々と姿を消した。それでも私は主に渋谷のスイングを拠点にブラインドを続けた。この頃になると、私が今まであまり聴かなかったミュージシャンも問題に出るようになるが、10年もの修業期間を経たためか、新しい音楽もどんどん覚えられた。特にテナーサクソ奏者を当てるのは大の得意だった。

今でも高田馬場のジャズ喫茶「イントロ」などに出て、月に1度くらいはブラインドを開催している。イントロに行くと、昔の“解答用紙”が残っている。日本のジャズ史の片隅に名を連ねたようでうれしくなる。

60年間ブラインドを続けたおかげで、80歳を超えても耳はすこぶるよい。ジャズを愛好する仲間が集う「ホットクラブ」という月1回の会合でもたまにブラインドを紹介・解説したりする。ジャズ、そしてブラインドとの思わぬ出合いが人生に潤いを与えてくれたのだ。（みとみ・えいichi=ブラインド研究家）